



史傳

ヴィクトリア女皇の傳

(ついで)

鄭越生補譯

斯くの如く、女皇には母君侯爵夫人の注意深き且つ熱心なる御教育によりて、十分昇事に御成人をそばしましたが、行く末は大英國の皇位を踐ませ給ふといふ尊き果報を備へさせ給ふ御身分なることは、女皇御自身は申すに及ばず母君さへ露御考へなさらなかつた事でございます。勿論女皇が御即位あらせらるゝやう機運のすゝみましたのは一千八百三十年（ジョージ四世王御崩去なされウ

イリアム四世王のつぎて御位に上らせられたる年）以後のことでありますので、夫れ以前には去る御考へのあるべき筈もなく、むしろ一向さる御希望のないのが當然であります。

しかるに女皇の御教育が、時の皇族方の御教育と普通外れて居りましたので、夙に母侯爵夫人の御胸中には女皇將來の御運命を充分洞見せられて居たまひしかの如く云ひなす人々もございませうが、何れも思ひすぎた説でその間違なることは明かなることでありませう。

殊にスコット氏の如きは、一千八百二十八年其の主宰せる雑誌に女皇當時の御有様を記載したてまつり、やがて帝位に上らせらるべき尊き御身分なるがゆゑに、と云ふ言語は此の頃女皇を鼓舞し奨励したてまつるために絶えず用ひられた警語で

あつたと云つてありまして、女皇御自身にも早くこの運命を知られて居たまひしやうに申して居りますが、是れ一層甚だしき誤認で、前にも申しした通り一千八百三十年以後次第に時運が女皇に幸したので、夫れより二年以前なる一千八百二十八年に、かゝる御思召が女皇にあるべき理由がないのは明かでございます。

女皇が御自身に御身分の皇位に近きことを御發見になりました時のことにつきましては、極めて興味ある御咄しが、レーゼン男爵夫人の備忘録によつて傳はりて居ります。

その備忘録によれば、男爵夫人が女皇に英國史を御教授申しあげしとき、女皇には擬心英國帝室系譜表を御覽になりて居られました、圖らず御身分の尊さを見出したまひ

今まで斯様な書物は見なかつた、私は思ひの外皇位に近き身分なりし

と、矢庭に聲高く仰せられました、やがて

皇位は尊さものである、併し尊さだけ夫れだけ責任が重大である、私は善良なる人とならんければなりません、諸種の學科に勉強せねばならぬ、ラチン語も一層精をいだして勉めねばなりません、なせなればラチン語は英語の基礎であり、莊嚴なる發表には是非とも必要であるといふゆゑに、叔母様のアウグストさまやメレーさまは御稽古なさらぬけれども、私は學はねばなりません、私は善良なる人にならんければなりません、と長大息とともに仰せられました、そこで男爵夫人は

併しアテレード(現帝ウイリアム四世の皇后)は
 まだ御齡若くあらせられますから、此ののち御
 慶事が御ありなされないものではございませぬ
 多分は御皇子方が御出産なさるでございませう、
 その時は勿論その御皇子が御位に即かせらるゝ
 のであります、

と申しあげますと女皇には

もしそうあつても私は失望しません、その皇子
 が即位するのは常典だから、

と仰せられたと書いてありますが的確に是が女皇
 の初めて御自身に御身分を知りたまひし時であつ
 たのでございませう。

御幼年ながら女皇には深くこの事實を御胸中に
 銘じたまひ、學をいそしみ、徳を樹て、ひたすら
 御身を重んじ、やがては十全の天子となり幾百万

と限りなき衆庶の尊敬を受けさすべき尊き身分な
 りと、いふことは瞬時り女皇の念頭を去らなかつ
 たやうであります。

カロリン、コックス氏の語るどころによれば、
 女皇には或る日英國史を朗讀せられて居られまし
 たが、カーロット女王殿下御薨去の條にいたり、
 急に同女王が皇太女に冊立られた事實より、將に
 女皇自身の上に来らんとする事實に想到し、巻を
 掩うて

若し此の女王の如く繼嗣に冊立せらるゝ事の我
 身に現實り來らば

と母君に御尋ねになつた、母君の御挨拶せらるゝ
 やうは

善良なる婦人とならんければならぬ、善良なる
 婦人は則ち善良なる女皇であるであらう

またダヒス博士の子息の云ふ處によれば、博士が或日女皇に英國の帝王表を列記せしめた、その時女皇には伯父ウイリアム四世王まで書き列ねました、博士は、それを見て

この次に帝位に即くべき人の名を御書きなさいと申し上げますと、女皇は嬌羞ながら

自身の名を書くは變だから

と仰せられましたと云つてありますが、コックス氏の物語といひ、ダヒス氏の物語といひ、何につけ彼につけ女皇が常に御身分の尊きことを御忘れなく、如何にも既に女皇になられ給ひしかの如く御思召されて居らせらるゝ事はよく了解ります。

(未完)



文苑

柞の露

東京秋影生



四十

人の噂も七十五日とやら、兎角人間は忘れ易いもので有る、容赦なく過去を葬て行くタイムの進につれて、新しい問題が湧いて來ると反比例に、過去の記憶はその彩色が褪めて塵けになつて仕舞ふが、此處に年々新なる記憶となつて寧ろ其明瞭の度を増して繰りかへされ、恐らく我には終生忘れることの出来ないのは、わが亡き母君の事である。

母君の亡くなられたは、わが十三の時、其時